復活節第３主日礼拝
２０２３年４月２３日（日）
題　「平和があるように」
テキスト：ルカによる福音書２４章３６～４９節

皆さま、おはようございます。
修祷館の前庭のツツジもきれいに咲き出しました。ことしは沢山の花を咲かせてくれるようです。
　さて、今日の聖書の個所には、イエスが復活された日の夕方に弟子たちにその姿を現されたことが記されています。
ご一緒にみ言葉を聞きましょう。
◆弟子たちに現れる
36:こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。
ユダヤ当局者に捕まることをおじ恐れて秘密にしていた部屋に集まっていた弟子たち。その心は愛するイエスを失った悲しみと、ユダヤ当局に捕まることを恐れる心も相まって恐れと慄きの中にいたことと思われます。
その弟子たちの真ん中に、復活されたイエスが立たれたと聖書は告げています。どのような方法でイエスが入って来られたのかは分かりませんが、聖書は確かによみがえられたイエスが弱りきった弟子たちたちの所に来られたことを伝えています。そして「あなたがたに平和があるように」と言われたのです。平和とはギリシア語ではエイレネ―と言われます。日本語では平安とも言われます。平安と言えば、心の平安のように思えますが平和は人間関係や社会の平和、国と国の状態を表すように思えます。ちなみにこの場面はヨハネによる福音書にも記されていますが、12弟子の一人であるトマスはこの時はいなかったようです。イエスを裏切ったユダはこの時、自害していましたのでいません。この時はいつもイエスの近くにいた弟子たちとエマオから帰って来た弟子たちもいたかもしれません。
イエスが現れた時、弟子たちは、恐れおののき、亡霊を見ているのだと思ったようです。
　　弟子たちは、単純には喜べず、むしろ恐れとおののきの感情に支配されたようです。自分たちがイエスを裏切ったこと、弟子のユダがいないことの
弟子内での人間関係の破れが明らかになっていたのです。これはもう修復不可能にみえるような状態だったのだと思います。これをわたしたちに置き換えると、家族間の人間関係の破れや、知人や地域や時には教会内においての人間関

係の破れにもあてはまるようにも思えます。
その中で、憤りや苦しみや悲しみをかかえていたであろう弟子たちにイエスは自らを表し、「あなたがたに平和があるように心に平安があるように」と言われたのです。温かいことばで包んでくださったのです。責められて当然なのに、イエスは弟子たちを責めないのです。振り返ってわたしたちはどうでしょうか？人間は人を責めることがあるのです。だめだと思っても責めて怒りの感情に支配されやすいのです。そして、遂にはそのような自分自身を責めることもあるのです。自分の人生に対して落ち込み、嘆くことさえあるのではないでしょうか。
　イエスは弟子たちの心の内を見抜いたかのように、弟子たちに語りかけました。38:そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。
「心に疑いを起こす」とは、心がザワツキ、今ある状態を受け入れられない。聞く耳も閉ざされ、聞こうとする心も失ってしまうことがあります。そのような状態の弟子たちに向かって、イエスは、
39:わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおり、わたしにはそれがある。」
40:こう言って、イエスは手と足をお見せになった。
見るという言葉が、この短い個所に沢山出ています。イエスは弟子たちに語りかけられます。人間は目で見ること、自分の目でみることを大切にしているかのようです。それは間違ってはいないのですが、それが度を越すと、そのことに、そのことだけに心が縛れやすくなります。復活のイエスは、ご自身の復活を弟子たちが納得させるために、この見るということに集中されたのだと思います。これはイエスの自分の愛した弟子たちが、今、挫折の暗闇の中にあること、ここから立ち直って生きて行くために必要な力であるイエスの愛を注ごうとされておられるのだと受け止めるのです。イエスの「良く見なさい。」との言葉かけは、イエスの「愛の集中」の心なのだと言えるのです。
　41 節には、「彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、」とあります。　弟子たちは、イエスの言葉を聞き、迫ってくるイエス愛の息遣いのことばを感じ知って、確かに喜んだのです。しかし、まだ信じられず不思議がったのです。喜び、信じられず、不思議がる。このことは、これから生きる弟子たちが事あるごとに、特に苦しみを経験する時に、喜びと信じれない、という思いが湧いてくることもあるのだと思います。その意味で信仰者に完成はないのだと思います。同時に地上の教会の完成もないのです。

しかし、パーフェクトではなくても、たとえほころびや破れはあったとしても、主イエスは弟子たちを、わたしたちを愛してくだっているのです。
そしてこの地上にイエスを信じ、イエスを語る、証する、信仰者の群れは必要なのです。神を信じ賛美する主の群れである教会は必要なのです。
神さまはたとえ困難の波が襲って来ても、必ず不思議な方法を用いて、信仰者を教会を導いて行かれるのです。

さて、今日の聖書の個所 41 節の後半には、
イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われたとあります。科学の時代に生きる者として、わたしは、聖書を読む中でこの個所はいらないのではないとさえ思ったことがあります。しかし、今は「ここに何か食べ物があるか」との復活のイエスのことばは、どこかユーモアを感じます。主イエスは弟子たちと共に食べることの中で自らの復活、永遠のいのちを表されたのではないかとさえ思えます。

42:そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、43:イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。

ちなみに「焼いた魚」とありますが、「魚」はその後のキリスト教の歴史ではキリスト教の根本を表す言葉となりました。「魚」という単語は新約聖書の原語のギリシア語では「イクスース」といいます。この言葉は、「イエス　キリスト神の子　救い主」ということばを表します。ギリシア語では「イエスース　クリストス　セウー　フィオス　ソーテル」となります。この単語の文字を一文字づつ集めると、「イクスース」つまり「魚」という単語になるのです。後の時代にキリスト教に対して迫害時代がやって来ました。その時、この「イクスース・魚」をキリスト教えの大切なシンボルとして使った歴史が現実にあったのです。　今日の聖書の個所によれば、イエスは、弟子たちの前で、焼いた魚を食べる姿を持って、疑う弟子たちの心の目を開き、ご自身の姿と聖書に記されている言葉を用いて、主イエスを信じるようにされたのです。この時、弟子たちは、イエスの愛と神を信じる信仰の杭を確かに打たれたのだと信じます。
弟子たちは復活のイエスに出会い、その姿と言葉を聞いて、イエスに留まる愛の杭を打たれ、主と共なる平安に包まれて歩み出すことができたのだと思うのです。それはここにいる、わたしたちにも当てはまると思います。わたしたちも、イエスによって愛の杭・イエスの十字架と復活の杭を打たれていることを信じ、イエスの復活の証人（あかしびと）とされた弟子たちの歩みにつながって生きて行きたいと願います。

皆様の上に主の平安を祈ります。　共に黙想しましょう。